紹介

岡村秀典著

『三角縁神獣鏡の時代』

鏡は歴史を語る魅力的な考古資料として、いま多くの人々の関心を集めている。一方、その評価や位置づけについて大きく異なる意見が対立しており、扱いの難しい資料でもある。三角縁神獣鏡については、製作地、性格、製作技法などをめぐるさまざまな議論があってとくにその感が強いが、ここに鏡の問題を鮮やかな手さばきで料理し、コンパクトにまとめた著作が出版された。

岡村秀典氏は中国考古学が専門。漢鏡の編年研究に大きな業績をあげ、その成果にもとづいて、日本の弥生・古墳時代の議論に対しても積極的に参加してきた。本書は、氏がこれまでに発表してきた諸論を一冊の書物にまとめたものでもある。

まず本書の目次を次に掲げよう。

中国鏡にみる倭国の風景
楽浪海中に倭人あり
東夷の王、大海を渡る
東夷の倭の奴国王、使いを遣り奉献す
共に一女子を立てて王となす
親魏倭王卑弥呼
倭国形成史の視点—むすびにかえて

この構成からもわかるように本書の力点は、三角縁神獣鏡が作られた時代自体もさることながら、むしろその前史におかれている。紀元前一世紀に倭が中国王朝と本格的な交渉をもって以降、紀元後三世紀、卑弥呼が親魏倭王に封ぜられ、その関係がひとつの頂点に達し、前方後円墳の誕生へと至るまでの時代を「三角縁神獣鏡の時代」とし、ひとつづきの流れとしてみようというのが著者の主張である。考古学的な時期区分としては、弥生時代と古墳時代にまたがるが、それぞれを別々に検討しがちな日本考古学への批判的提言ともなっている。

こうした記述を進めるにあたり、分析の武器として用いられたのは、著者独自の漢鏡編年である。記述の流れはこの漢鏡編年による七期区分による。

各章の冒頭で、『後漢書』、『三国志』などに記された中国王朝と倭との交渉記事を取り上げた後、考古学的な検討に進む。墳墓から出土する鏡について、大小、鏡式、数量、型式構成などの要素を分析し、鏡の保有状況から被葬者の地位を推測する。また同時期の鏡出土墳墓の比較検討から、階層性などの社会的関係を読みとる。さらに分布状況などから、中国王朝との関係や政治構造の変化を描く。

中国との交渉が本格化した漢鏡3期（紀元前一世紀前半）には、傑出した副葬鏡数を誇る福岡県須玖岡本遺跡D地点墓と同県三雲南小路一号墓を頂点とし、鏡の大きさや数量、その他の副葬品において墓葬に階層性が認められる。両者はそれぞれ「奴」と「伊都」の首長であり、彼らは漢の楽浪郡に定期的に朝貢し、鏡を中心とする文物を贈与された。そして両者を核とする「漢鏡分配システム」により、配下あるいは周辺の首長にも鏡がもたらされた（「楽浪海中に倭人あり」）。

漢鏡4期（紀元前一世紀後葉から一世紀はじめ）には「伊都」の福岡県井原鑓溝遺跡のように多数の漢鏡を保有した首長が前代に続いて存在する一方、漢鏡の保有層が拡大する。唐津平野や佐賀平野においては

族長間で首長権が移動したことが認められる。北部九州以外の地にも鏡などの舶載文物がもたらされ、その中には古墳時代までの長期間にわたって「伝世」されたものもあらわれる（「東夷の王、大海を渡る」）。

漢鏡5期（紀元後一世紀中ごろ～後半）。「漢委奴国王」の金印によって、「奴」の首長が中国王朝から外臣に冊封されたことが読みとれる。鏡出土の墳墓としては「伊都」の領域にきわめて豊富な副葬品をもつ平原一号墓がいとなまれるが、その被葬者は前代までの首長系譜とは異なる可能性を指摘する。一方、九州以東にもたされる漢鏡の数は増大し、北陸・東海まで分布域が拡大する。この地域的ひろがりが「倭国王帥升等」における「倭」の範囲を示す可能性を述べる（「東夷の倭の奴国王、使いを遣り奉献す」）。

漢鏡6期（紀元後二世紀前半）から7期（紀元後二世紀後半～三世紀はじめ）にかけての記述はダイナミックな変化を描いて生彩に富む。

まず漢鏡6期には漢鏡を大量に副葬する墳墓がみられなくなり、全体の出土数が漸減し分布域も縮小する。出土数の減少は楽浪墳墓でも同様であり、史書に記述された「倭国大乱」や楽浪郡の混乱などの社会状況を反映したものとみる。

漢鏡7期は三角縁神獣鏡が配布される直前の段階にあたる。著者はこの時期に鏡の出土数が激増すること、とくに分布の中心が北部九州から近畿地方へと移ることを重視し、そこに邪馬台国を盟主とする倭政権の誕生をみる。この漢鏡7期の鏡群のまとまりを指摘し、その意義を取り上げたのは岡村氏の重要な研究成果である（「共に一女子を立てて王となす」）。

そしていよいよ真の三角縁神獣鏡の時代に入る。周知のように、三角縁神獣鏡の製作地については魏鏡説と呉の工人渡来による日本製説が対立して現在に至る。岡村氏は三角縁神獣鏡魏鏡説の代表的論者であるが、ここでもさまざまな論拠を取り上げて魏鏡説を補強し、いわゆる「銅鏡百枚」が三角縁神獣鏡にほかならないことを強調する。それらは倭にむけて魏が特別に製作した特鋳鏡であり、以上にみてきた中国王朝と倭との対外交渉の歩みの中でもひとつの頂点となるできごとであったと評価する。さらにそれらは数次にわたって下賜され、前方後円墳の形成に示されるような倭政権のいちじるしい伸長においても重要な役割を果たしたと述べる（「親魏倭王卑弥呼」）。

以上のような時間の流れに沿った論述は明快であり、読みやすい内容となっている。著者の記述は巧妙で、読者の理解を助けるためにまず史書の記事を用い、それらと考古学的な分析を交えながらも、主体はあくまで鏡を中心とした考古学的な検討にある。

中国王朝との関係および鏡の保有状況の変化という視点から、この時代の流れを一連のものとして描くことの意義は容易に理解できる。このように鏡を年代区分して、その分布状況から政治階層の動きを読みとる方法は、富岡謙蔵以来の伝統的な手法であるが、本書ではそれがより細密な分析に基づき、より洗練した形で示される。

ただしここで述べられた、近畿地方の弥生時代における鏡の「伝世」、平原一号墓の年代、三角縁神獣鏡の製作地などは、異論の多い問題でもある。一般向けの書物という性格もあるが、著者は、やや泥沼状況にあるそれらの論争への深入りを避け、自説の根拠と異説への反論を簡潔に述べるにとどめた。専門的な関心をもつ読者の中に

は、その点についてやや不足を感じる方があるかもしれない。

しかし明快で一貫した論旨こそが本書のもっとも優れた点である。もちろん個別の議論を欠くことはできないが、歴史像のレベルでの議論も重要であろう。論争を実りあるものとするためにも、本書とは異なる立場、たとえば三角縁神獣鏡日本製説により、本書と張り合うに足る、明確で総合的な歴史解釈を提示した著作が登場することを期待したい。

（四六判　本文二〇一頁　一九九九年五月　吉川弘文館　一七〇〇円）

（森下章司　京都大学大学院文学研究科助手）

受贈図書

（一九九九年五月一五日～一九九九年八月一二日）

研究紀要（尾道短期大学）四八―一
歴史学報（国立成功大学歴史学系）二三
民俗学研究所紀要（成城大学民俗学研究所）二三
諸国叢書（成城大学民俗学研究所）一五
ЭТНОГРАФИЧЕСКОЕ ОБОЗРЕНИЕ (НАУКА) 5
一橋論叢（一橋大学一橋学会）一二一―五、六・一二二―一、二
アジア研究所所報（亜細亜大学アジア研究所）九四・九五
札幌大学総合論叢（札幌大学）七
ХОДПМ 札幌大学図書館報（札幌大学図書館）3～12
韓國史研究彙報（国史編纂委員会）一〇四
図像蒐成Ⅵ（佛教美術研究上野記念財団助成研究会）
考古学報（中国社会科学院考古研究所）一九九九―一、二
立命館大学国際平和ミュージアムだより（立命館大学国際平和ミュージアム）六―三
白山史学（東洋大学白山史学会）三五
東洋大学文学部紀要（東洋大学）五二（史学科篇二四）
鹿児島経大論集（鹿児島経済大学経済学部学会）三九―四・四〇―一
日本音楽史研究（上野学園日本音楽資料室）二
史観（早稲田大学史学会）一四〇
神道史研究（神道史学会）四七―一
アジア研究所紀要（亜細亜大学アジア研究所）二五
大倉山論集（大倉精神文化研究所）四三
東洋学文献類目（京都大学人文科学研究所附属東洋学文献センター）一九九六
教育学部論集（福島大学教育学部）六四・六五
広島大学文学部紀要（広島大学文学部）五八・五八特輯号一～四
人文地理（人文地理学会）五一―二、三
法学論集（九州国際大学法学会）五―二、三合併号
史料（皇学館大学史料編纂所）一六〇・一六一
大伏古窯分布調査報告書（妙見山麓遺跡調査会）
円満寺東の谷遺跡　西安田長野遺跡群調査報告（Ⅰ）（妙見山麓遺跡調査会）
国史学（国史学会）一六八
三康文化研究所年報（三康文化研究所）三〇
岡崎市史研究（岡崎市教育委員会）二〇
アジアセンターニュース（国際交流基金アジアセンター）一一・一二
紀州経済史文化史研究所紀要（和歌山大学紀州経済史文化史研究所）一九